

1 自然の恵みとともに

大正5年の生産物ランキング

1916(大正5)年、北海道は第一次世界大戦の好景気のなかにあります。この表は、当時の北海道の生産品を生産額の多い順に、相撲の番付表になぞらえて示したものです。当時は、特に農業や食料品工業の生産が拡大し、豆やでんぷんが欧米へ輸出されました。そして豊富な石炭と木材を背景に、鉄鋼業や製紙業なども発展します。約100年前の番付表には、今も北海道でつくられているもの、北海道外や海外でつくられているもの、今は使われていないものが掲載されています。

北海道では、18世紀の終わりごろからはニシンやサケなどの漁業が、19世紀の終わりごろには海外からの新しい技術を取り入れた農業がさかんになりました。そして、20世紀はじめには好景気のなかで工業が発展しました。そのような流れのなかで、ジャガイモでんぷん、ビート糖、乳製品、缶詰、合板、ゴムなど、さまざまな産物がつくられるようになりました。

その背景には、海に囲まれ、広い森と大地が広がる北海道の豊富な資源がありました。また、そのような自然の恵みに満ちた北海道の大地、海、山を相手に、さまざまに働きかけてきた人びとの営みがありました。

北海道は今、日本を代表する農業生産地です。街から離れると、広大な畑や田、牧草地が広がっています。そのかげには、森林を切り開いたり、水路をつくったりといったさまざまな作業の積み重ねがありました。また、寒い気候のなかで作物を育てるには、大変な努力が必要でした。

ニシン、サケ、イカ、カニ、タラ、ホタテ、ウニ、アワビ、ナマコなど、海産物も豊富でした。人びとは、磯まわりで道具を巧みに操り、少し離れた沖では大きな網を使い、遠く離れた北の海へもたくさんの船で出かけて漁をしました。獲れた魚などは、干物や缶詰、さらには田畑の肥料にも加工しました。

北海道の山にはたくさんの石炭が眠っていました。19世紀の終わりごろから本格的に炭鉱が開発され、そのころの日本のくらしや産業を支えた石炭の生産地となりました。山には太い木もたくさん生えていました。人びとは、冬になると、森で大きなのこぎりで木を伐ったり、馬そりなどで伐り出した木を運んだりして働きました。

航路、道路、鉄道などの交通網が整えられていくと、北海道の産物は北海道外、そして海外へも運ばれていきました。そのかげで、囚人や「タコ」とよばれた人びとが、危険な環境下で無理やり働かされ、多くの人が命を落としたことを忘れてはなりません。

ニシン大漁の時代

かつて、北海道の春の漁業はニシンではじまりました。今から100年以上も前には、北海道全体で約100万tものニシンが獲れていました。ニシンは、北海道を代表する魚で、そのほとんどは、^{しめかす}などの肥料に加工されました。ニシン漁の季節には、多くの人手が必要であったことから、北海道内や本州からたくさんの人びとが出稼ぎにやってきました。また、獲れた大量のニシンを効率的に加工するためには、大きな道具が必要でした。

黒いダイヤの時代

北海道は、金、銀、銅、鉛などの金属鉱物から、石炭、硫黄、石灰石などにいたるまで、地下資源が豊富でした。1887(明治20)年ごろには北海道内の精密な地質鉱床の調査が行われ、各地の鉱山開発が進みました。とくに、^{黒いダイヤ}ともよばれた石炭は、明治のはじめごろから炭鉱の開発が進められ、昭和になるころには、石炭産業は北海道を代表する産業となりました。

